

論文の内容の要旨

論文題目 歯周病のリスクファクターに関する研究
-電力会社変電所従業員（台湾）を対象として-

指導教官 荒記 俊一

東京大学大学院医学系研究科

平成5年4月入学

第3種博士課程（医学）

社会医学専攻

氏名：宋 慧玲

歯周病は、歯肉の炎症が他の歯周組織に進展し、歯周ポケットを形成し、歯肉内縁上皮の付着部位が歯根側に移動し、歯槽骨が吸収され、最終的に歯の喪失を招くことから歯の喪失に最も重大な歯科疾患として知られている。さらに心疾患、消化器疾患などの全身疾患の発症と関連する可能性が高いことから、その予防対策の重要性が再認識されている。普段の日常生活習慣（ライフスタイル）と歯周病との間には関連があると歯科臨床上の経験から予想はされるものの、広く一般化されている実証的知見は少なく、現在のところ歯科健診における歯周病の予防対策の中でもライフスタイルへの注意がほとんどなされていない状況である。

以上の背景から本研究では、台湾の北部にある某電力会社の変電所 563 人の男子従業員全員（563 人、年齢 15-64 歳、平均 35 歳）を調査対象として、地域歯周病治療必要度指数（Community Periodontal Index of Treatment Needs,

CPITN) を用いて歯周病の程度を把握するとともに喫煙数量、飲酒量、労働時間、間食習慣、コーヒー摂取量、運動量等のライフスタイルと、衛生習慣上の歯磨き習慣、歯科受診率、歯科受診習慣、定期健診の有無、歯の健康度自己評価、歯の健康満足度、両親の歯周病罹患の有無等に関する質問紙調査を実施した。

全口腔歯周病と口腔内 6 分割のリスクファクターのうち CPITN が 3 点以上の群の方が 2 点以下の群より有意に高かったまたは多かったものは以下の通りであった。①年齢(すべての対象歯) ②母親の歯周病歴あり(すべての対象歯) ③歯科受診なし(すべての対象歯)④喫煙あり (上顎前歯と左下顎臼歯部) ⑤兄弟の歯周病歴あり (左右上顎臼歯部以外のすべての部位)⑥歯磨き習慣なし(下顎全部の部位) ⑦甘いもの嫌い (下顎前歯部) ⑧父親の歯周病歴あり (上顎前歯部) ⑨睡眠時間 (上下顎前歯部)。

一方、CPITN が 3 点以上の群の方が有意に小さかったまたは少なかったものは以下の通りである。①労働時間(右下顎臼歯部以外のすべて)②朝食習慣なし(左右下顎臼歯以外のすべての部位)③塩分摂取を注意せず (左右上顎臼歯部) ④間食習慣あり (下顎前歯部) ⑤歯磨き指導受けず (上顎前歯部) ⑥定期歯科検診受けず (上顎前歯部)。

CPITN 得点を目的変数、リスクファクターの中で上記の有意差があったものを説明変数としてロジスティック分析を行った。この結果、年齢が全ての対象歯の歯周病と有意な正の関係があった。同様に、喫煙ありが左下顎臼歯部(46)、上顎前歯部(11)の歯周病と有意な正の関係があった。労働時間が口腔内全般の歯周病と右上顎臼歯部(16)の歯周病と有意な負の関係があった。歯科受診なしが上顎前歯部(11)、左下顎臼歯部(46)の歯周病と有意な正の関係があった。朝食習慣なしが口腔内全般の歯周病の進展度と有意な正の関係があった。歯磨き習慣なしが下顎全部の部位の歯周病と有意な正の関係があった。全対象歯を合計した歯周病(口腔内全般)に対しては、年齢、短い労働時間、朝食習慣なしの 3 種のリスクファクターが歯周病の進展度と有意な関係を認めた(各々 $p < 0.001$, $p = 0.004$, $p = 0.04$)。母親の歯周病罹患歴と歯周病の悪化との間にもほぼ有意な関係を認めた ($p = 0.050$)。以上より、年齢を調整後も、

喫煙、短労働時間、母親の歯周病、歯科受診なし、朝食習慣なしおよび歯磨き習慣なしが歯周病のリスクファクターであることが示唆された。

本研究結果は、大企業に勤務する15歳から64歳男性勤労者の結果であり、この知見をそのまま一般化することはできない。しかし、本研究によって明らかになったリスクファクターに関する知見を他の職種集団においても検討し、また健康教育に応用することによって、今後、歯周病の効果的な予防対策が実施されることが期待される。